

2 麦 類

(1) 要 旨

ア 作付面積

令和2年産4麦（小麦、二条大麦、六条大麦及びはだか麦）の子実用作付面積は27万6,200haで、前年産に比べ3,200ha（1％）増加した。

このうち、北海道は12万4,200ha、都府県は15万2,100haで、前年産に比べてそれぞれ900ha（1％）、2,300ha（2％）増加した（表2-1、図2-1）。

イ 収穫量

令和2年産4麦の子実用収穫量は117万1,000tで、前年産に比べ8万9,000t（7％）減少した。

これは、小麦、二条大麦及びはだか麦が、天候に恵まれ、生育が順調で登熟も良好であったものの、特に作柄の良かった前年産の10a当たり収量を下回ったためである（表2-1、図2-1）。

図2-1 4麦（子実用）の作付面積及び収穫量の推移（全国）

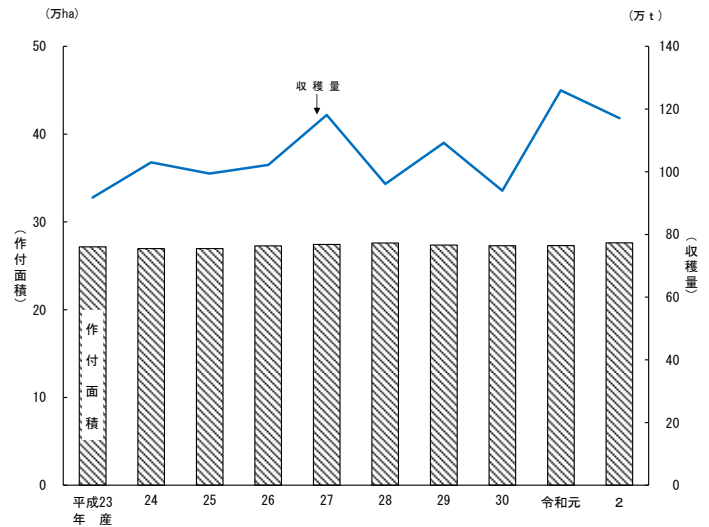


表2-1 令和2年産4麦（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積 ha	10 a 当たり 収 量 kg	収 穫 量 t	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収	収 穫 量		10a当たり 平均収量 対 比	10a当たり 平均収量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比	%	kg	
全 国				ha	%	%	t	%	%	kg	
4 麦 計	276,200	...	1,171,000	3,200	101	nc	△ 89,000	93	nc	...	
小 麦	212,600	447	949,300	1,000	100	91	△ 87,700	92	109	411	
二条大麦	39,300	368	144,700	1,300	103	95	△ 1,900	99	120	306	
六条大麦	18,000	314	56,600	300	102	100	800	101	108	290	
はだか麦	6,330	322	20,400	550	110	92	100	100	124	260	
北 海 道											
4 麦 計	124,200	...	638,100	900	101	nc	△ 47,600	93	nc	...	
小 麦	122,200	515	629,900	800	101	92	△ 47,800	93	109	474	
二条大麦	1,760	432	7,600	60	104	96	△ 20	100	120	361	
六条大麦	19	142	27	2	112	32	△ 48	36	42	337	
はだか麦	195	286	557	46	131	134	240	176	92	311	
都 府 県											
4 麦 計	152,100	...	533,000	2,300	102	nc	△ 41,100	93	nc	...	
小 麦	90,400	353	319,400	200	100	89	△ 40,000	89	110	322	
二条大麦	37,500	366	137,100	1,200	103	96	△ 1,900	99	120	304	
六条大麦	18,000	314	56,600	300	102	100	900	102	108	290	
はだか麦	6,140	324	19,900	510	109	91	△ 100	100	125	260	

注：1 「(参考) 10a当たり平均収量対比」とは、10a当たり平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値をいう。ただし、直近7か年全ての10a当たり収量が確保できない場合は、6か年又は5か年の最高及び最低を除いた平均とし、4か年又は3か年の場合は、単純平均である。）に対する当年産の10a当たり収量の比率である。なお、直近7か年のうち、3か年分の10a当たり収量のデータが確保できない場合は、10a当たり平均収量を作成していない（以下各統計表において同じ。）。

2 全国農業地域別（都府県を除く。）の10a当たり平均収量は、各都府県の10a当たり平均収量に当年の作付面積を乗じて求めた収穫量（平均収穫量）を全国農業地域別に積み上げ、当年の全国農業地域別作付面積で除して算出している（以下各統計表において同じ。）。

表 2-2 令和 2 年産 4 麦（子実用）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

全農地	国業城	4 麦 計		小 麦				二 条 大 麦				六 条 大 麦				は だ か 麦			
		作 付 面積	収 穫 量	作 付 面積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比	作 付 面積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比	作 付 面積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比	作 付 面積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比
		ha	t	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%
全 国		276,200	1,171,000	212,600	447	949,300	109	39,300	368	144,700	120	18,000	314	56,600	108	6,330	322	20,400	124
北 海 道		124,200	638,100	122,200	515	629,900	109	1,760	432	7,600	120	19	142	27	42	195	286	557	92
都 府 県		152,100	533,000	90,400	353	319,400	110	37,500	366	137,100	120	18,000	314	56,600	108	6,140	324	19,900	125
東 北		7,660	20,600	6,300	254	16,000	110	14	250	35	97	1,340	344	4,610	nc	x	100	x	nc
北 陸		9,740	28,700	355	177	627	83	2	250	5	167	9,380	300	28,100	102	2	150	3	nc
関 東・東 山		37,600	126,600	20,500	340	69,800	91	12,200	344	42,000	95	4,520	299	13,500	97	x	291	x	nc
東 海		17,000	68,500	16,200	407	65,900	118	11	200	22	171	703	333	2,340	127	x	252	x	nc
近 畿		10,400	34,700	8,090	319	25,800	124	x	330	x	nc	1,930	397	7,670	142	x	294	x	nc
中 国		6,580	22,700	2,690	348	9,370	124	2,860	374	10,700	118	x	216	x	113	927	257	2,380	140
四 国		5,130	19,400	2,400	387	9,290	116	x	467	x	nc	x	x	x	x	2,710	369	10,000	133
九 州		58,000	211,700	33,900	361	122,500	110	22,300	376	83,800	135	19	363	69	105	1,760	305	5,370	119
沖 縄		x	x	13	146	19	92	x	x	x	x	-	-	-	nc	-	-	-	nc

(2) 解 説

ア 小麦（子実用）

(ア) 作付面積

小麦の作付面積は21万2,600haで、前年産並みとなった。

このうち、北海道は12万2,200haで、前年産に比べ800ha（1%）増加した。

また、都府県は9万400haで、前年産並みとなった（表2-1、2-2、図2-2）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は447kgで、前年産を9%下回った。

これは、天候に恵まれ、生育が順調で登熟も良好であったものの、特に作柄の良かった前年産の10 a 当たり収量を下回ったためである。

このうち、北海道は515kgで、前年産を8%下回った。

また、都府県は353kgで、前年産を11%下回った（表2-1、2-2、図2-2、2-3、2-4）。

(ウ) 収穫量

収穫量は94万9,300 t で、前年産に比べ8万7,700 t（8%）減少した。

このうち、北海道の収穫量は62万9,900 t で、前年産に比べ4万7,800 t（7%）減少した。

また、都府県の収穫量は31万9,400 t で、前年産に比べ4万 t（11%）減少した（表2-1、2-2、図2-2）。

図 2-2 小麦の作付面積、収穫量及び 10 a 当たり収量の推移（全国）

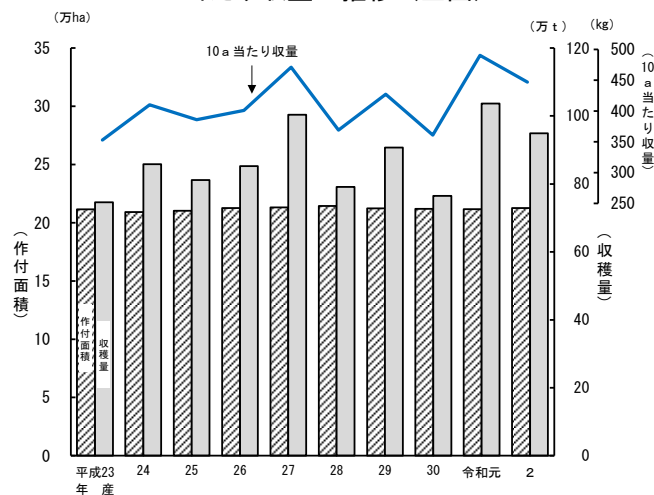


図 2 - 3 令和 2 年産麦作期間の半旬別気象経過（帯広）

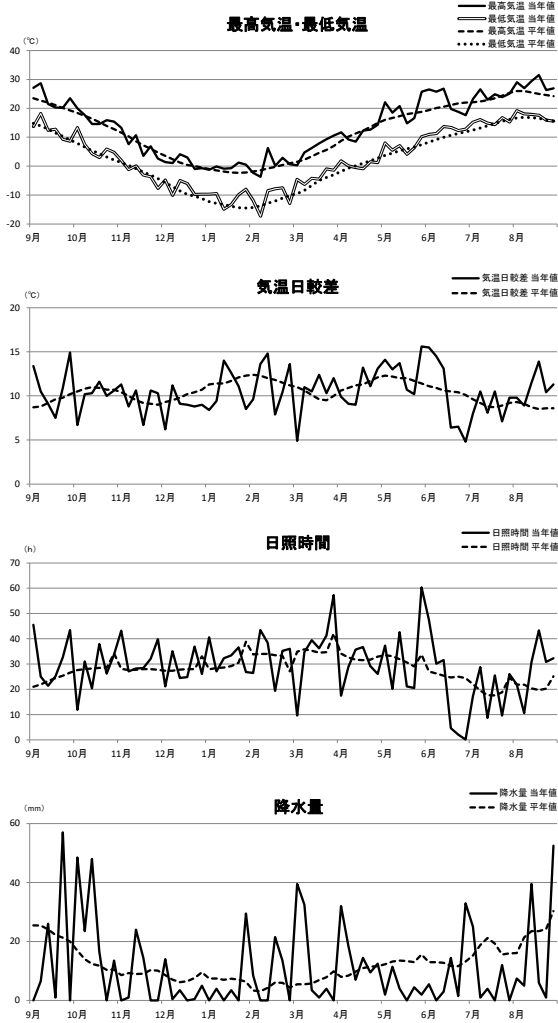
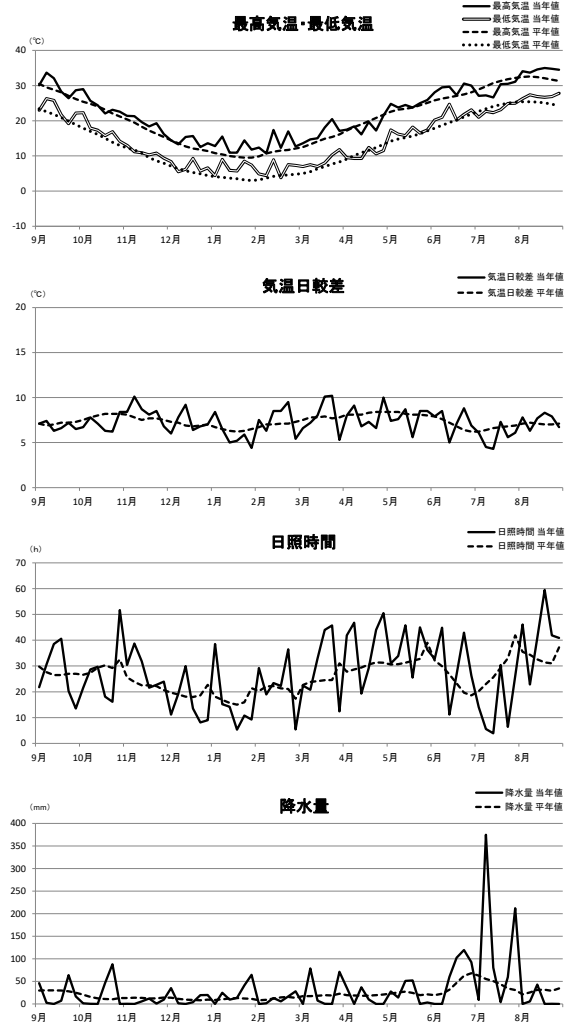


図 2 - 4 令和 2 年産麦作期間の半旬別気象経過（福岡）



イ 二条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

二条大麦の作付面積は3万9,300haで、前年産に比べ1,300ha（3%）増加した。

このうち、北海道は1,760haで、前年産に比べ60ha（4%）増加した。

一方、都府県は3万7,500haで、前年産に比べ1,200ha（3%）増加した（表2-1、2-2、図2-5）。

(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は368kgで、前年産を5%下回った。

これは、天候に恵まれ、生育が順調で登熟も良好であったものの、特に作柄の良かった前年産の10a 当たり収量を下回ったためである（表2-1、2-2、図2-5、2-6、2-7）。

(ウ) 収穫量

収穫量は14万4,700tで、前年産に比べ1,900t（1%）減少した（表2-1、2-2、図2-5）。

図2-5 二条大麦の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）

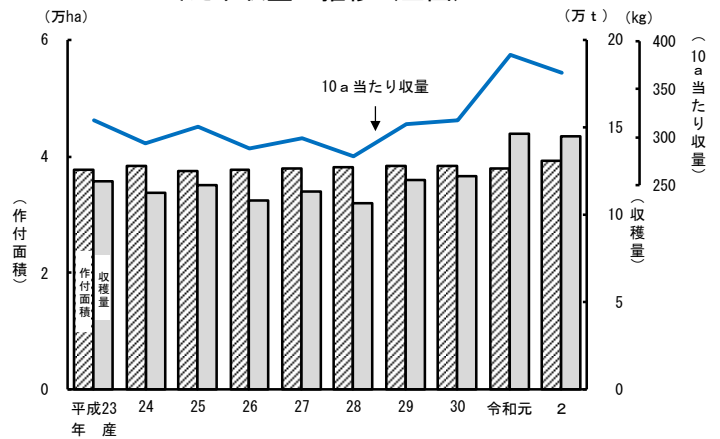


図2-6 令和2年産麦作期間の半旬別気象経過（栃木）

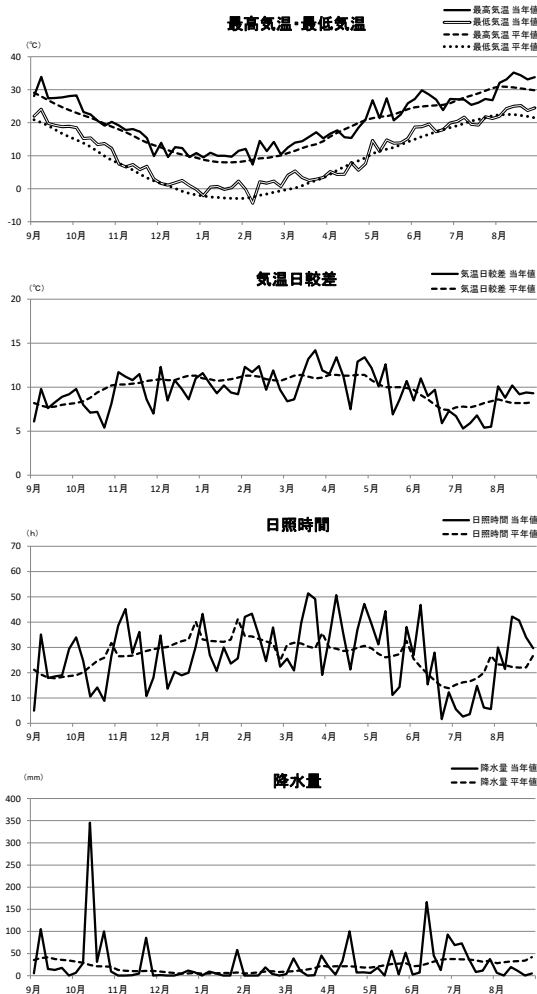
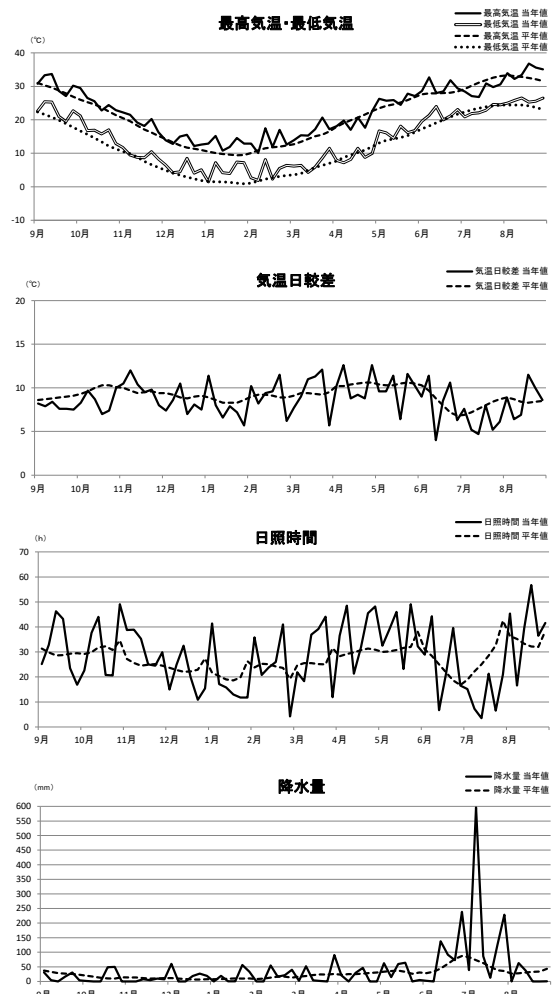


図2-7 令和2年産麦作期間の半旬別気象経過（佐賀）



ウ 六条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

六条大麦の作付面積は1万8,000haで、前年産に比べ300ha（2%）増加した（表2-1、2-2、図2-8）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は314kgで、前年産並みとなった（表2-1、2-2、図2-8、2-9、2-10）。

(ウ) 収穫量

収穫量は5万6,600tで、前年産に比べ800t（1%）増加した（表2-1、2-2、図2-8）。

図2-8 六条大麦の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

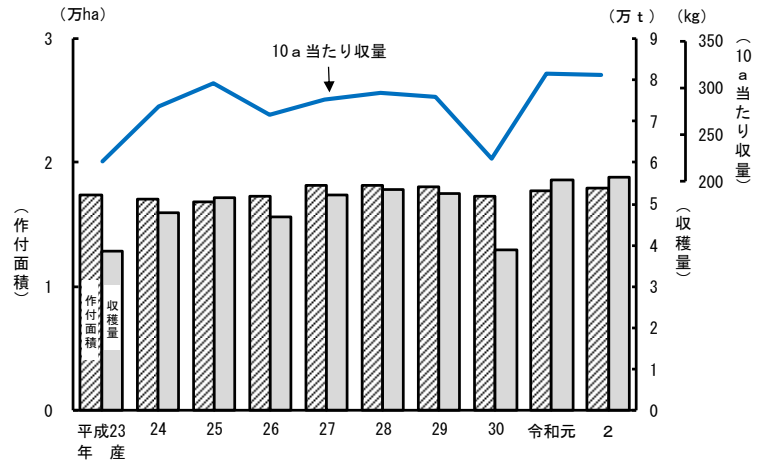


図2-9 令和2年産麦作期間の半月別気象経過（富山）

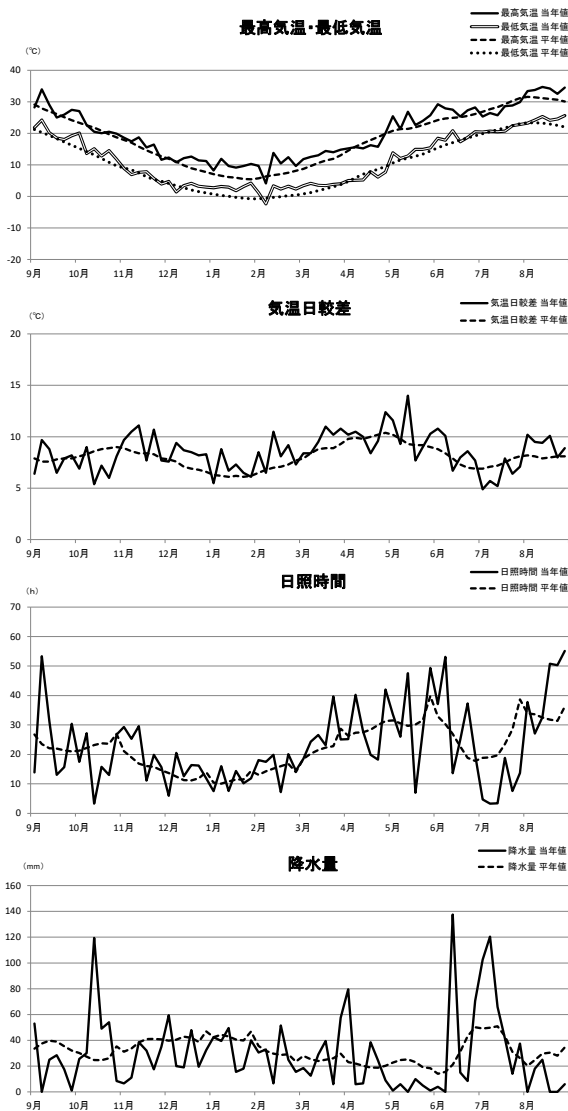
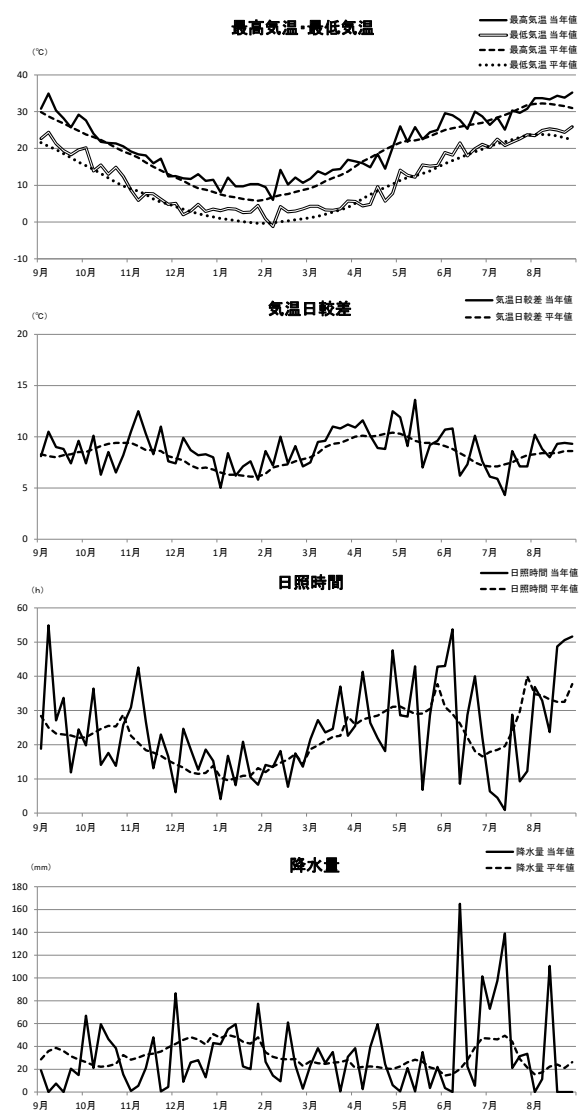


図2-10 令和2年産麦作期間の半月別気象経過（福井）



エ はだか麦（子実用）

(ア) 作付面積

はだか麦の作付面積は6,330haで、前年産に比べ550ha（10%）増加した（表2-1、2-2、図2-11）。

(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は322kgで、前年産を8%下回った。

これは、天候に恵まれ、生育が順調で登熟も良好であったものの、特に作柄の良かった前年産の10a 当たり収量を下回ったためである（表2-1、2-2、図2-11、2-12、2-13）。

(ウ) 収穫量

収穫量は2万400tで、前年産並みとなった（表2-1、2-2、図2-11）。

図2-11 はだか麦の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）

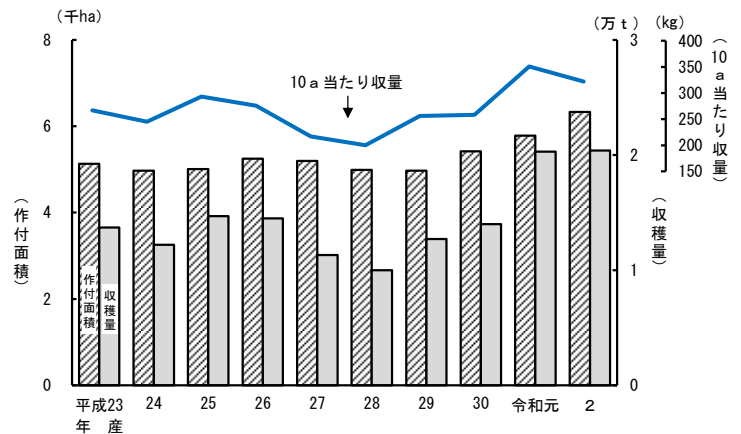


図2-12 令和2年産麦作期間の半旬別気象経過（愛媛）

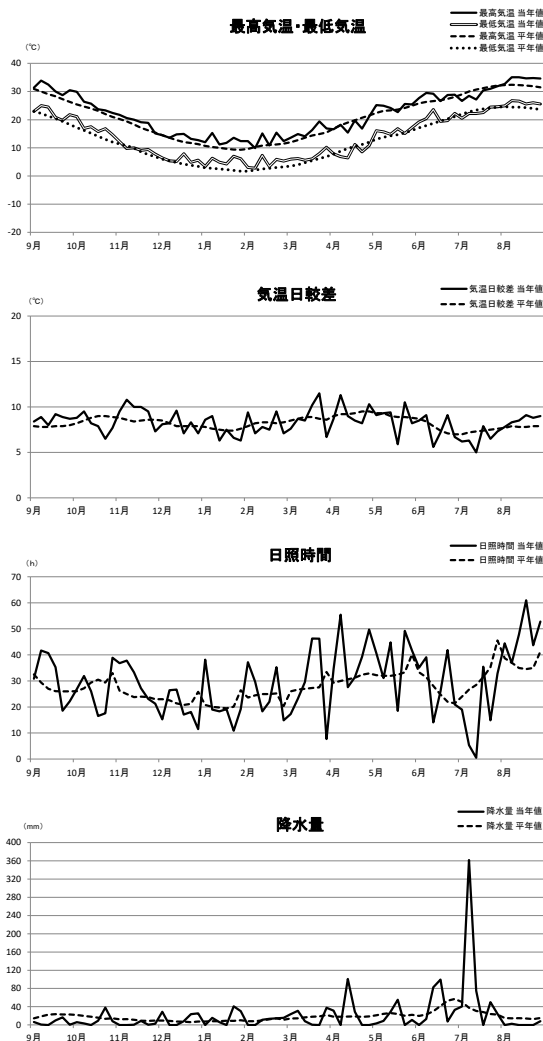
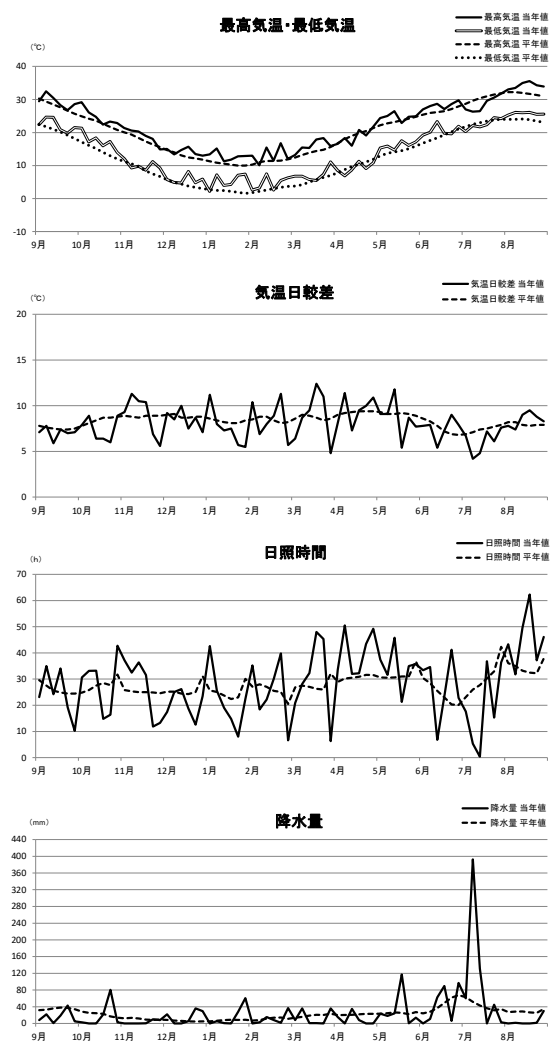


図2-13 令和2年産麦作期間の半旬別気象経過（大分）



3 豆類・そば

(1) 要 旨

令和2年産豆類（乾燥子実）の収穫量は、大豆が21万8,900 t、らっかせいは1万3,200 tで、それぞれ前年産に比べ1,100 t（1%）、800 t（6%）増加した。一方、小豆が5万1,900 t、いんげんは4,920 tで、前年産に比べ7,200 t（12%）、8,480 t（63%）減少した。

また、そば（乾燥子実）の収穫量は4万4,800 tで、前年産に比べ2,200 t（5%）増加した（表3）。

表3 令和2年産豆類（乾燥子実）及びそば（乾燥子実）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						（ 参 考 ）	
				作 付 面 積		10 a 当たり 収 量	収 穫 量		10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg		
大 豆	141,700	154	218,900	△ 1,800	99	101	1,100	101	96	161	
小 豆	26,600	195	51,900	1,100	104	84	△ 7,200	88	89	218	
うち北海道	22,100	220	48,600	1,200	106	83	△ 6,800	88	87	252	
いんげん	7,370	67	4,920	510	107	34	△ 8,480	37	35	191	
うち北海道	6,880	68	4,680	540	109	34	△ 8,020	37	34	198	
らっかせい	6,220	212	13,200	△ 110	98	108	800	106	93	228	
うち千葉	4,980	220	11,000	△ 80	98	111	900	109	95	231	
そ ば	66,600	67	44,800	1,200	102	103	2,200	105	124	54	

注： 小豆、いんげん及びらっかせいの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。令和2年産調査については主産県を対象に調査を実施した。なお、全国値は、主産県の調査結果から推計したものである。

(2) 解 説

ア 大豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

大豆の作付面積は14万1,700haで、前年産に比べ1,800ha（1%）減少した（表3、図3-1）。

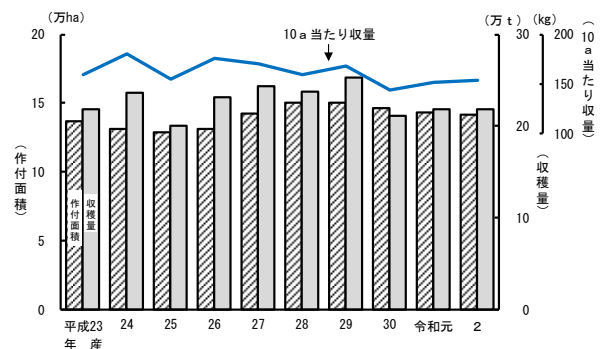
(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は154kgで、前年産を1%上回った（表3、図3-1）。

(ウ) 収穫量

収穫量は21万8,900 tで、前年産に比べ1,100 t（1%）増加した（表3、図3-1）。

図3-1 大豆の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



イ 小豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

小豆の作付面積は2万6,600haで、前年産に比べ1,100ha（4％）増加した。

このうち、主産地である北海道の作付面積は2万2,100haで、他作物からの転換等により、前年産に比べ1,200ha（6％）増加した（表3、図3-2）。

(イ) 10 a 当たり収量

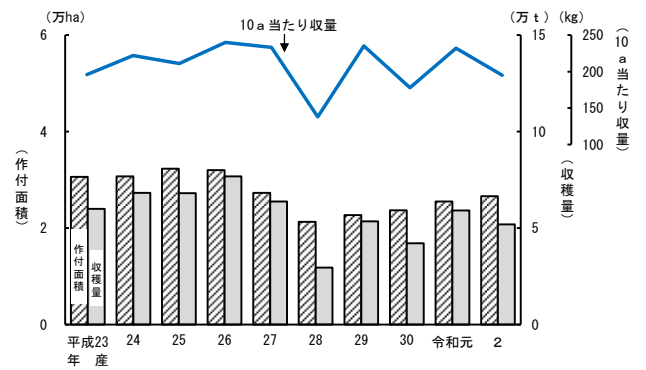
10 a 当たり収量は195kgで、前年産を16％下回った。

これは、主産地である北海道において、登熟期の高温により粒の肥大が抑制されたことに加え、収穫期の降雨による被害粒が発生したためである（表3、図3-2）。

(ウ) 収穫量

収穫量は5万1,900 tで、前年産に比べ7,200 t（12％）減少した（表3、図3-2）。

図3-2 小豆の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



ウ いんげん（乾燥子実）

(ア) 作付面積

いんげんの作付面積は7,370haで、前年産に比べ510ha（7％）増加した。

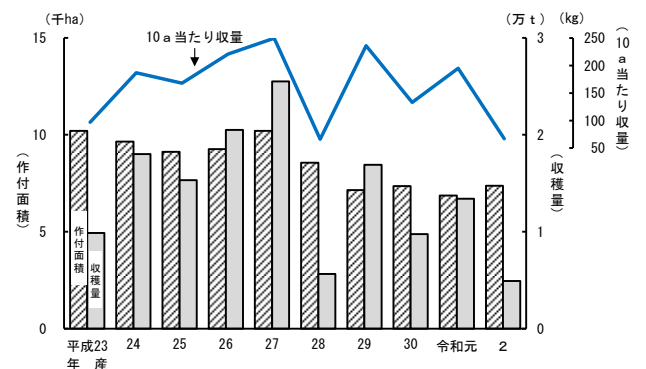
このうち、北海道の作付面積は6,880haで、他作物からの転換等により、前年産に比べ540ha（9％）増加した（表3、図3-3）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は67kgで、前年産を66％下回った。

これは、主産地である北海道において、登熟期の高温により粒の肥大が抑制されたことに加え、収穫期の降雨、日照不足による着色不良等の被害粒が発生したためである（表3、図3-3）。

図3-3 いんげんの作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は4,920 tで、前年産に比べ8,480 t（63％）減少した（表3、図3-3）。

エ らっかせい（乾燥子実）

(ア) 作付面積

らっかせいの作付面積は6,220haで、前年産に比べ110ha（2%）減少した。

このうち、千葉県の前年産に比べ80ha（2%）減少した（表3、図3-4）。

(イ) 10a当たり収量

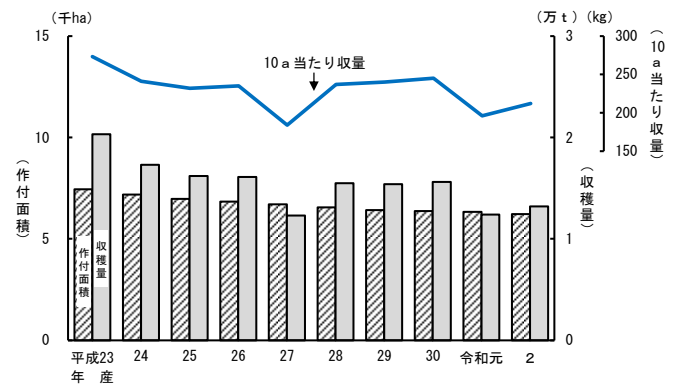
10a当たり収量は212kgで、前年産を8%上回った。

これは、主産地である千葉県において、降雨、日照不足による影響はあったものの、前年産において作柄低下の要因となった台風被害がなかったためである（表3、図3-4）。

(ウ) 収穫量

収穫量は1万3,200tで、前年産に比べ800t（6%）増加した（表3、図3-4）。

図3-4 らっかせいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



オ そば（乾燥子実）

(ア) 作付面積

そばの作付面積は6万6,600haで、前年産に比べ1,200ha（2%）増加した。

これは、他作物からの転換等があったためである（表3、図3-5）。

(イ) 10a当たり収量

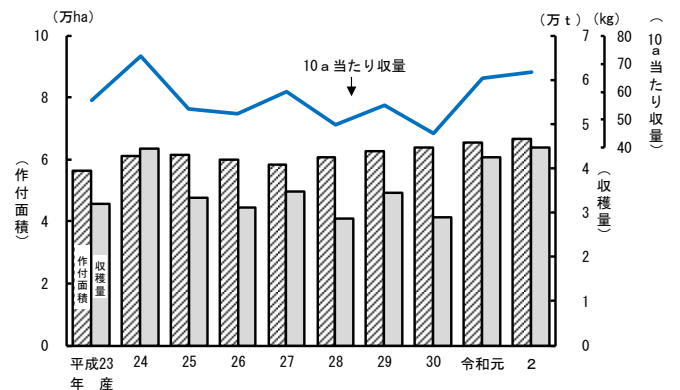
10a当たり収量は67kgで、前年産を3%上回った。

これは、生育期間の天候がおおむね良好で、台風等による被害が少なかったためである（表3、図3-5）。

(ウ) 収穫量

収穫量は4万4,800tで、前年産に比べ2,200t（5%）増加した（表3、図3-5）。

図3-5 そばの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



4 かんしょ

(1) 作付面積

かんしょの作付面積は3万3,100haで、前年産に比べ1,200ha（3%）減少した。

これは、高齢化による労力不足に伴う作付中止や他作物への転換等があったためである（表4、図4）。

(2) 10a当たり収量

10a当たり収量は2,080kgで、前年産を5%下回った。

これは、主に宮崎県及び鹿児島県において生育期間の日照不足等に加えて、サツマイモ基腐病の拡大があったためである（表4、図4）。

(3) 収穫量

収穫量は68万7,600tで、前年産に比べ6万1,100t（8%）減少した（表4、図4）。

図4 かんしょの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

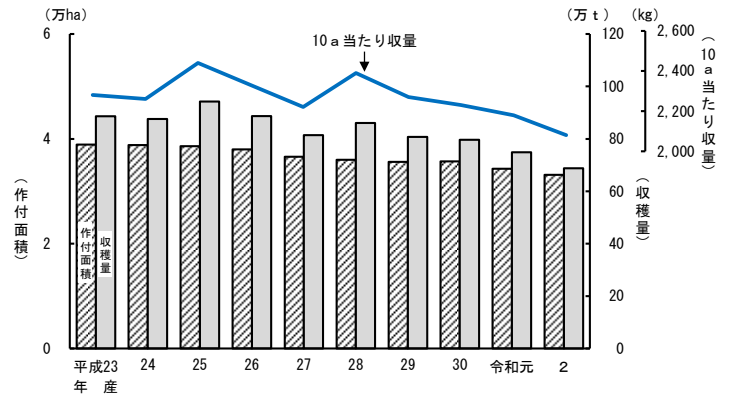


表4 令和2年産かんしょの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10a 当たり 収量	収穫量		10a 当たり 平均収量 対比	10a 当たり 平均収量	
				対差	対比	対比	対差	対比	%	kg	
全 国	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
	33,100	2,080	687,600	△ 1,200	97	95	△ 61,100	92	91	2,290	
うち 茨 城	7,000	2,600	182,000	140	102	106	13,900	108	102	2,560	
千 葉	3,940	2,290	90,200	△ 100	98	99	△ 3,500	96	93	2,460	
徳 島	1,090	2,490	27,100	0	100	100	△ 200	99	100	2,490	
熊 本	824	2,100	17,300	△ 73	92	98	△ 2,000	90	94	2,240	
宮 崎	2,990	2,310	69,100	△ 370	89	96	△ 11,500	86	92	2,520	
鹿 児 島	10,900	1,970	214,700	△ 300	97	85	△ 46,300	82	80	2,460	

注：かんしょの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。令和2年産調査については、作付面積調査は全国、収穫量調査は主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

5 飼料作物

(1) 牧草

ア 作付（栽培）面積

牧草の作付（栽培）面積は71万9,200haで、前年産に比べ5,200ha（1%）減少した（表5-1、図5-1）。

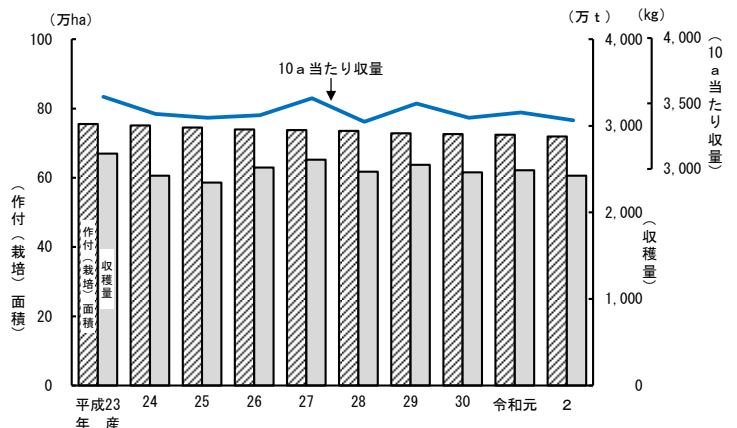
イ 10a当たり収量

10a当たり収量は3,370kgで、前年産を2%下回った（表5-1、図5-1）。

ウ 収穫量

収穫量は2,424万4,000tで、前年産に比べ60万6,000t（2%）減少した（表5-1、図5-1）。

図5-1 牧草の作付（栽培）面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



注：平成24年産及び平成25年産の10a当たり収量及び収穫量については、全国値の推計を行っていないため、主産県計の数値である。

表5-1 令和2年産牧草の作付（栽培）面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付(栽培)面積	10a当たり収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付(栽培)面積		10a当たり収量		収穫量		10a当たり平均収量対比	10a当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
全 国	ha 719,200	kg 3,370	t 24,244,000	ha △ 5,200	% 99	% 98	t △ 606,000	% 98	% 98	kg 3,430	
うち北海道	530,400	3,200	16,973,000	△ 2,400	100	98	△ 450,000	97	98	3,250	

注：牧草の作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。令和2年産調査については、作付面積調査は全国、収穫量調査は主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(2) 青刈りとうもろこし

ア 作付面積

青刈りとうもろこしの作付面積は9万5,200haで、前年産に比べ500ha（1%）増加した（表5-2、図5-2）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は4,960kgで、前年産を3%下回った（表5-2、図5-2）。

ウ 収穫量

収穫量は471万8,000tで、前年産に比べ12万3,000t（3%）減少した（表5-2、図5-2）。

図5-2 青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

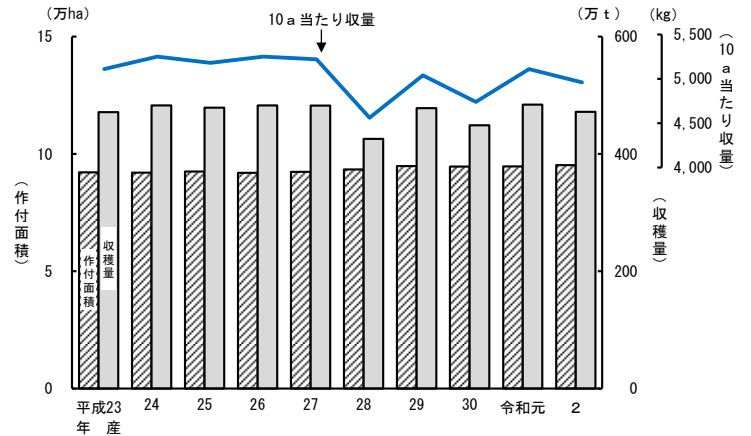


表5-2 令和2年産青刈りとうもろこしの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10a 当たり 収量		収穫量		10a 当たり 平均収量 対比	10a 当たり 平均収量
				対差	対比	対比	対比	対差	対比		
全 国	ha 95,200	kg 4,960	t 4,718,000	ha 500	% 101	% 97	t △ 123,000	% 97	% 98	kg 5,060	
うち北海道	57,400	5,400	3,100,000	1,100	102	98	△ 13,000	100	100	5,390	

注：青刈りとうもろこしの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。令和2年産調査については、作付面積調査は全国、収穫量調査は主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(3) ソルゴー

ア 作付面積

ソルゴーの作付面積は1万3,000haで、前年産に比べ300ha（2%）減少した（表5-3、図5-3）。

イ 10aあたり収量

10aあたり収量は4,140kgで、前年産を5%下回った。

これは、主に九州地域において、日照不足等により、生育が抑制されたことに加え、台風による倒伏等の被害が発生したためである（表5-3、図5-3）。

ウ 収穫量

収穫量は53万7,600tで、前年産に比べ4万500t（7%）減少した（表5-3、図5-3）。

図5-3 ソルゴーの作付面積、収穫量及び10aあたり収量の推移（全国）

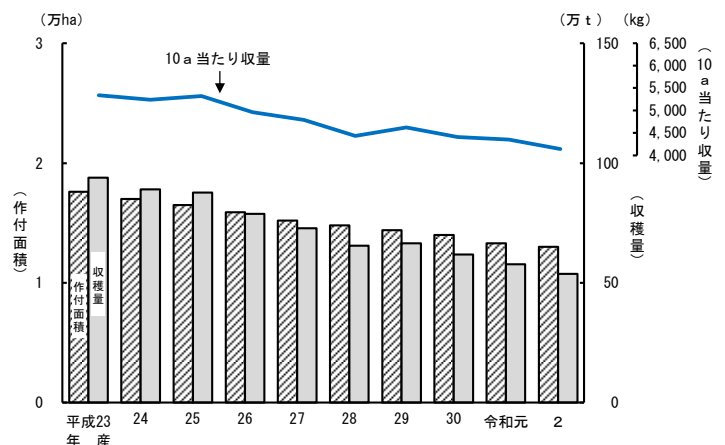


表5-3 令和2年産ソルゴーの作付面積、10aあたり収量及び収穫量

区分	作付面積	10aあたり収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10aあたり収量		収穫量		10aあたり平均収量対比	10aあたり平均収量
				対差	対比	対比	対比	対差	対比		
全 国	ha 13,000	kg 4,140	t 537,600	ha △ 300	% 98	% 95	t △ 40,500	% 93	% 89	kg 4,640	

注：ソルゴーの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。令和2年産調査については、作付面積調査は全国、収穫量調査は主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

6 工芸農作物

(1) 茶

ア 栽培面積

全国の茶の栽培面積は3万9,100haで、前年産に比べ1,500ha（4%）減少した（表6-1）。

イ 摘採実面積

全国の摘採実面積は3万4,300haであった（表6-2）。

ウ 生葉収穫量

全国の生葉収穫量は32万8,800tであった（表6-2）。

エ 荒茶生産量

全国の荒茶生産量は6万9,800tで、前年産に比べ1万1,900t（15%）減少した。

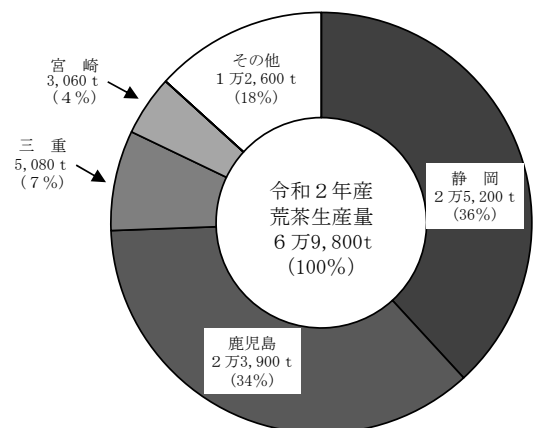
都府県別にみると、静岡県が2万5,200t（全国に占める割合は36%）、次いで鹿児島県が2万3,900t（同34%）、三重県が5,080t（同7%）、宮崎県が3,060t（同4%）となっている（表6-2、図6-1）。

表6-1 茶の栽培面積（全国）

単位：ha	
区 分	栽 培 面 積
令和元年	40,600
2	39,100
対前年産比（%）	96

注：茶の栽培面積については、令和元年調査は主産県、2年調査は全国調査であり、元年の全国値は主産県の調査結果から推計したものである。

図6-1 荒茶生産量割合（全国）



注：数値及び割合については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない。

表6-2 令和2年産茶の摘採面積、10a当たり生葉収量、生葉収穫量及び荒茶生産量（全国）

区 分	摘 採 面 積		10 a 当 たり 生 葉 収 量		生 葉 収 穫 量		荒 茶 生 産 量	
	実 面 積	延 べ 面 積	一 番 茶		一 番 茶		一 番 茶	
	ha	ha	kg	kg	t	t	t	t
令和元年産	81,700	...
2	34,300	77,800	959	405	328,800	138,600	69,800	27,500
対前年産比（%）	nc	nc	nc	nc	nc	nc	85	nc

注：茶の収穫量調査は主産県調査であり、6年周期で全国調査を実施している。令和元年産調査については主産県、2年産調査については全国を対象に調査を実施した。なお、令和元年産の荒茶生産量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(2) なたね（子実用）

ア 作付面積

なたねの作付面積は1,830haで、前年産に比べ70ha（4%）減少した。

これは、連作障害等による作付中止と他作物への作付転換があったためである（表6-3、図6-2）。

イ 10a 当たり収量

10a 当たり収量は196kgで、特に作柄の良かった前年産を10%下回った（表6-3、図6-2）。

ウ 収穫量

収穫量は3,580 tで、前年産に比べ550 t（13%）減少した（表6-3、図6-2）。

図6-2 なたねの作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）

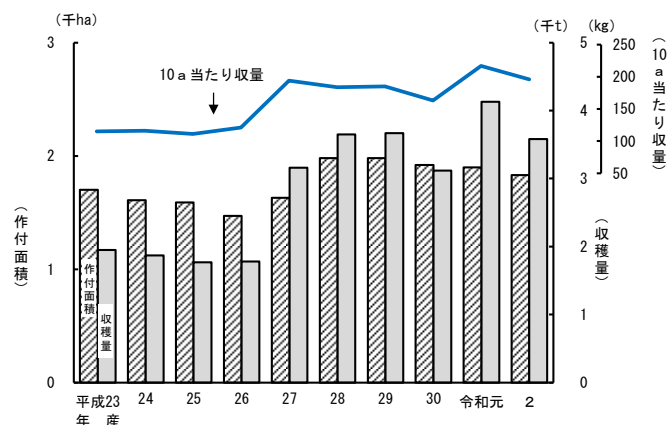


表6-3 令和2年産なたねの作付面積、10a 当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり収量	収穫量	前年産との比較					(参考)	
				作付面積		10a 当たり収量	収穫量		10a 当たり平均収量対	10a 当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比		
全国	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg
	1,830	196	3,580	△ 70	96	90	△ 550	87	116	169

(3) てんさい（北海道）

ア 作付面積

北海道のてんさいの作付面積は5万6,800haで、前年産並みとなった（表6-4、図6-3）。

イ 10a当たり収量

北海道の10a当たり収量は6,890kgで、特に作柄の良かった前年産を2%下回った（表6-4、図6-3）。

ウ 収穫量

北海道の収穫量は391万2,000tで、前年産に比べ7万4,000t（2%）減少した（表6-4、図6-3）。

図6-3 てんさいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（北海道）

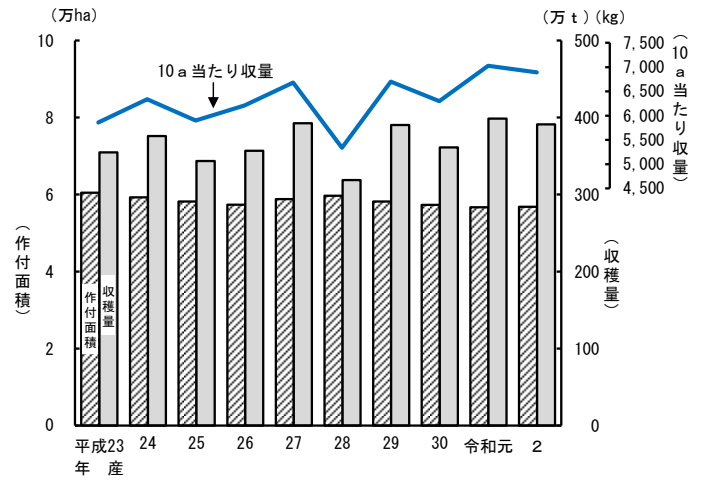


表6-4 令和2年産てんさいの作付面積、10a当たり収量及び収穫量（北海道）

都道府県	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較					(参考)	
				作付面積		10a 当たり 収	収穫量		10a 当たり 平均収量 対比	10a 当たり 平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比		
ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
北海道	56,800	6,890	3,912,000	100	100	98	△ 74,000	98	108	6,360

注：てんさいの収穫量調査は、北海道を対象に実施した。

(4) さとうきび

ア 収穫面積

さとうきびの収穫面積は2万2,500haで、前年産に比べ400ha（2%）増加した（表6-5、図6-4）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は5,940kgで、前年産を12%上回った。

これは、生育期間の天候がおおむね良好に経過し、台風等の被害が軽微であったためである（表6-5、図6-4）。

ウ 収穫量

収穫量は133万6,000tで、前年産に比べ16万2,000t（14%）増加した（表6-5、図6-4）。

図6-4 さとうきびの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移

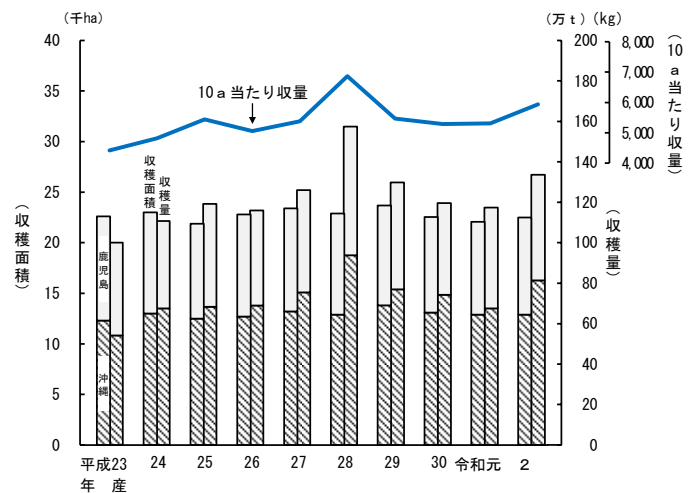


表6-5 令和2年産さとうきびの作型別栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積	収穫面積				10a当たり収量			
		計	夏植え	春植え	株出し	計	夏植え	春植え	株出し
全国	ha	ha	ha	ha	ha	kg	kg	kg	kg
令和元年産	27,200	22,100	4,680	2,940	14,500	5,310	6,660	5,110	4,910
2	27,900	22,500	4,590	3,210	14,600	5,940	7,730	5,320	5,550
対前年産比(%)	103	102	98	109	101	112	116	104	113
鹿児島	11,000	9,600	1,190	1,800	6,610	5,440	7,070	5,370	5,170
対前年産比(%)	104	105	101	103	106	100	99	101	101
沖縄	16,900	12,900	3,400	1,410	8,040	6,310	7,960	5,250	5,830
対前年産比(%)	102	100	97	118	98	120	122	109	122

区分	収穫量			
	計	夏植え	春植え	株出し
全国	t	t	t	t
令和元年産	1,174,000	311,600	150,100	712,100
2	1,336,000	354,900	170,700	810,800
対前年産比(%)	114	114	114	114
鹿児島	522,500	84,100	96,700	341,700
対前年産比(%)	105	100	105	106
沖縄	813,900	270,800	74,000	469,100
対前年産比(%)	120	119	128	120

注：さとうきびの作付面積調査及び収穫量調査は、鹿児島県及び沖縄県を対象に実施した。

(5) こんにゃくいも

ア 栽培面積・収穫面積

全国のこんにゃくいもの栽培面積は3,570haで前年産に比べ90ha（2%）減少した。

また、全国の収穫面積は2,140haで、前年産並みとなった（表6-6、図6-5）。

イ 10a当たり収量

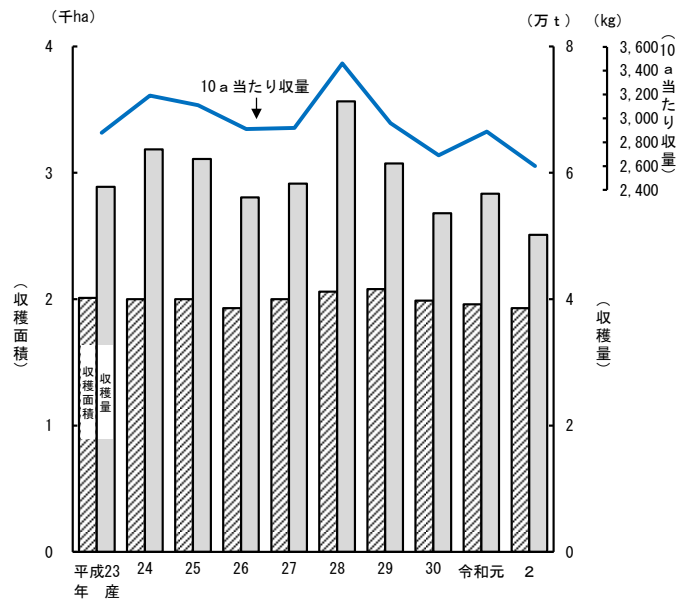
全国の10a当たり収量は2,510kgで、前年産を9%下回った。

これは、主産地である群馬県において、8月の高温・少雨の影響等により、いもの肥大が抑制されたためである（表6-6、図6-5）。

ウ 収穫量

全国の収穫量は5万3,700tで、前年産に比べ5,400t（9%）減少した（表6-6、図6-5）。

図6-5 こんにゃくいもの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（主産県）



注：こんにゃくいもの全国値が全て揃わないため、主産県計で作成している。また、令和2年産については、群馬県のみ値である。

表6-6 令和2年産こんにゃくいもの栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積 ha	収穫面積 ha	10a 当たり 収量 kg	収穫量 t	前年産との比較						(参考)		
					栽培面積		収穫面積		10a 当たり 収量	収穫量		10a 当たり 平均収量 対比	10a 当たり 平均収量
					対差	対比	対差	対比	対比	対差	対比	%	kg
全国	3,570	2,140	2,510	53,700	△ 90	98	△ 10	100	91	△ 5,400	91	92	2,720
うち群馬	3,210	1,930	2,600	50,200	△ 40	99	30	102	89	△ 5,100	91	88	2,970

注：こんにゃくいもの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。令和2年産調査については、主産県を対象に調査を実施した。主産県とは、令和元年産までは栃木県及び群馬県の2県であったが、令和2年産からは群馬県のみである。なお、全国値は、主産県の調査結果から推計したものである。

(6) い (主産県)

ア 作付面積

主産県（福岡県及び熊本県。以下同じ。）における「い」の作付面積は424haで、前年産に比べ52ha（11%）減少した。

これは、他作物への転換等があったためである（表6-7、図6-6）。

イ 10aあたり収量

主産県の10aあたり収量は1,490kgで、前年産を1%下回った（表6-7、図6-6）。

ウ 収穫量

主産県の収穫量は6,300tで、前年産に比べ830t（12%）減少した。

これは、作付面積が減少したことに加え、10aあたり収量が前年産を下回ったためである（表6-7、図6-6）。

エ 畳表生産農家数及び畳表生産量

主産県の「い」の生産農家数は363戸で、前年産に比べ43戸（11%）減少した。

このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は360戸で、前年に比べ42戸（10%）減少した。

なお、令和元年7月から令和2年6月までの畳表生産量は2,260千枚で、前年に比べ240千枚（10%）減少した（表6-7）。

図6-6 「い」の収穫面積、収穫量及び10aあたり収量の推移（主産県）

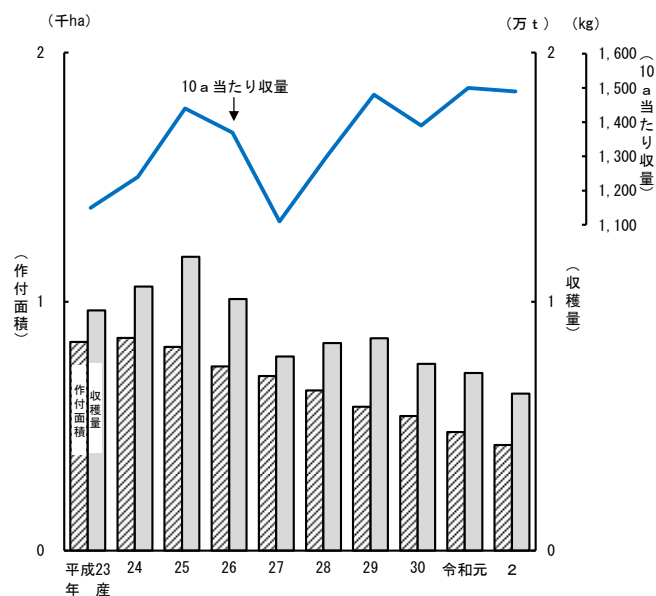


表6-7 令和2年産「い」の作付面積、10aあたり収量、収穫量等（主産県）

区分	「い」 生産 農家数	作付 面積 ha	10 a 当 た り 収 量 kg	収 穫 量 t	前年産との比較					(参考)		畳表生産 農家数 戸	畳表 生産量 千枚
					作付面積		10a 当 た り 収 量	収 穫 量		10aあたり 平均収量 対	10aあたり 平均収量		
					対 差	対 比	対 比	対 差	対 比	%	kg		
主産県計	363	424	1,490	6,300	△ 52	89	99	△ 830	88	106	1,400	360	2,260
福 岡	6	4	1,100	44	△ 1	80	89	△ 18	71	89	1,230	7	20
熊 本	357	420	1,490	6,260	△ 51	89	99	△ 810	89	106	1,400	353	2,240

注：1 「い」の調査は、福岡県及び熊本県を対象に実施した。

2 い生産農家数は、令和2年産の「い」の生産を行った農家の数である。

3 畳表生産農家数は、「い」の生産から畳表の生産まで一貫して行っている農家で、令和元年7月から令和2年6月までに畳表の生産を行った農家の数である。

4 畳表生産量は、畳表生産農家によって令和元年7月から令和2年6月までに生産されたものである。

5 主産県計の10aあたり平均収量は、各県の10aあたり平均収量に当年産の作付面積を乗じて求めた平均収穫量を積み上げ、当年産の主産県計作付面積で除して算出している。